神戸新聞　令和５年５月１０日　水曜日（朝刊）

若年性認知症の

市民団体がガイドブック

体験談を紹介

本人、家族の葛藤赤裸々に

加古川　加古川市の市民団体「加古川認知症の人と家族、サポーターの会」（通称・加古川元気会）が、若年性認知症の当事者、家族の体験を記した冊子「若年性認知症　生活支援ガイドブック―寄り添ってあしたへ―」を作った。受診の仕方など基礎知識のほか、発症時の戸惑いや不安、病気との付き合い方を赤裸々に明かしている。同会は「病気と共に生きていくための道しるべになってほしい」としている。　（斉藤正志）

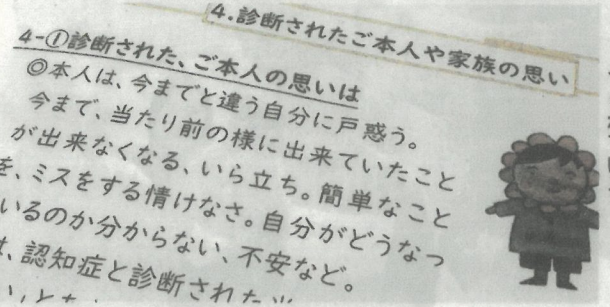
若年性認知症は、65歳未満で発症する認知症。仕事を持つ現役世代が病気になれば、本人だけでなく、家族の生活にも大きな影響があり、不安を抱く人が多いという。

冊子では、発症した本人は、これまで当たり前にできていたことができなくなり、いら立ちや情けなさ、不安にさいなまれることを説明した。

妻が63歳で認知症と診断された男性は、妻と当時20歳の次男との会話を紹介。「お母さんは、認知症になってしまった。これから何もしてあげられなくなったけど、許してね。ごめんね」と涙を浮かべる妻に対し、次男は「心配せんでええで。お母さんは、いつまでたってもお母さんやから」と抱き締めたという。

別の人は、夜中に初めて認知症の家族が徘徊（はいかい）した際「『きっとこれからも、こんなことがずっと起こるんや』と思うと、こわくて玄関の前に座り込んで号泣しました」と記載。加古川元気会で話を聞いてもらい、慰めになったという。

「若年性認知症　生活支援ガイドブック」を作った「加古川認知症の人と家族、サポーターの会」のメンバー＝加古川市野口町長砂



冊子では家族らの赤裸々な体験がつづられている

「苦しむ人の安心につながれば」

車を運転してしまうことへの対応では、運転免許証を返納したことを忘れる父に対し、「手作りの感謝状」を目に付きやすい場所に貼ったことを紹介。「自主返納の決断を表彰します」と書き、自ら返したという気持ちを持ってもらった。

薬剤師や社会保険労務士ら専門職の助言も載せ、初めて受診する際の準備の仕方や、休職中に健康保険の傷病手当金を受けられるケースがあることも記した。

加古川元気会は2010年に発足。毎月第２火曜に市内で勉強会と交流の場を設けている。毎月第４火曜は「たんぽぽの会」として、家族らが気軽に体験を話し合える茶話会を開く。

岡田義則代表（70）は「若年性認知症は情報が少なく、発症した際に本人や家族が苦しむことが多い。冊子がそうした人の指針となり、少しでも安心につながればうれしい」と話す。

Ａ４判、60ページ。同市加古川町寺家町の東播磨生活創造センター「かこむ」で閲覧できる。希望者にはデータをメールで送る。岡田代表☎090・9862・2170